

# 保育参加による大学授業の改善

－附属幼稚園との連携による「幼児と環境Ⅱ」の実践を通して－

岩本廣美

(社会科教育講座)

前田喜四雄

(自然環境教育センター、附属幼稚園)

比留間みどり・上野由利子・木村公美・原田真智子・竹内範子・長谷川かおり・山口智佳子  
(附属幼稚園)

## Student's Participation to Kindergarten education for Improving College Program

Hiromi IWAMOTO

(Department of Social Studies, Nara University of Education)

Kishio MAEDA

(Center for Natural Environment Education, Nara University of Education)

Midori HIRUMA・Yuriko UENO・Kumi KIMURA・Machiko HARADA・Noriko TAKEUCHI・

Kaori HASEGAWA・Chikako YAMAGUCHI

(Kindergarten attached to Nara University of Education)

**概要：**本報告は、奈良教育大学で展開している授業科目「幼児と環境Ⅱ」を、附属幼稚園と密接な連携を取りつつ改善してきた立場から、「焼き芋」を通じた園児と学生の交流を実現していった意図や経過を具体的に明らかにし、授業改善の背景や意義を述べたものである。「幼児と環境Ⅱ」の授業は、従来講義と実習をバランス良く組み合わせ、幼稚園教育要領に示された環境領域の内容を比較的満遍なく取り上げる形で展開してきた。しかし、受講生の属性変化などを考慮し、平成16年度は、附属幼稚園との連携をより深めて、保育参加と野外活動としての「焼き芋大会」を軸に、学生の「体験参加型」授業へと特化させていった。その結果、学生が授業の中で学ぶ質的側面はきわめて充実したものになったことが確認された。また、園児や保護者の「焼き芋大会」への受け止め方は、改善の余地を残すものの、概ね良好であり、附属幼稚園にとっては環境領域のねらいが確実に達成されたことも明らかとなった。

**キーワード：**保育参加 participation to kindergarten education、環境領域 environmental field、野外活動 outdoor activity

### 1. 問題の所在

本報告は、奈良教育大学（以下「本学」と記す）で展開している授業科目「幼児と環境Ⅱ」を、附属幼稚園と密接な連携を取りつつ改善してきた立場から、「焼き芋」を通じた園児と学生の交流を実現していった意図や経過を具体的に明らかにするとともに、授業改善の背景や意義を述べるものである。本報告は、また、平成16年度の本学教育実践総合センタープロジェクト「焼き芋を通じた園児と大学生の交流」による研究成果を示したものである。

「幼児と環境Ⅱ」は、現行の幼稚園教育要領で示された5領域のひとつである環境領域に対応する教職専門科目として、本学で毎年度後期水曜日3・4限（10：40～12：10）に2単位で開講している授業である。この半期授業の前半を岩本廣美が、後半を重松敬一（数学教育講座）がそれぞれ担当しており、本報告で取り上げるのは、10月から11月にかけて実施している前半の岩本（以下「担当者」と記す）が担当する授業内容に関するものである<sup>1)</sup>。

「幼児と環境Ⅱ」では、平成13年度まで毎年11月下旬頃に学生に、野外実習として「芋掘り」および落ち

葉を活用した「焼き芋」の活動を体験させてきた。これは、学生の大半が落ち葉を活用した「焼き芋」を自分の手で行ったことがないのをはじめとする全般的な体験不足（岩本、2001）を補うとともに、幼児教育に関わる学生の実践的力を高めることを目的に展開してきたものである。平成14年度からは、「芋掘り」や「焼き芋」を体験するだけでなく、附属幼稚園<sup>2)</sup>の理解・協力を得て、「焼き芋」に園児を招待し、園児に焼いたサツマイモを贈呈する機会を設けることにした。このことによって、園児や保護者は、日常生活の中で日頃体験することができない「落ち葉たき」に身近に接するとともに、落ち葉で焼き上げたばかりのサツマイモを手に取り食べるという体験を獲得することになった。この体験は、附属幼稚園におけるその後の保育展開の中で、園児が「自分たちも落ち葉でサツマイモを焼いてみたい」という願望を持つ基盤になっていったという側面もあった。いっぽう、焼き上げたサツマイモを園児に贈呈することは、学生に、「芋掘り」後のサツマイモの保管を確実に行う（大久保、1995）とともに、「焼き芋」を成功させなければならないという責任感を持たせることにもなった。しかし、平成14年度と15年度の取り組みでは、「焼き芋」を確実に成功させるという目的は達成されたにしても、学生と園児との接触場面がごくわずかであったことは否定できず、多くの学生から園児との接触場面をより多く設定してほしいという要望が出されたことは無理のないことであった。授業改善の必要な理由のひとつはこの点にあった。

「幼児と環境Ⅱ」で以上のような取り組みを展開してきたことは別に、授業改善が必要となっていた理由がもうひとつあった。それは、平成14年度から「幼児と環境Ⅱ」を受講する学生の属性が変化してきたことである。「幼児と環境Ⅱ」の受講者は、それまで基本的に幼稚園教員を目指す学生が中心であったが、平成14年度から、幼稚園教員を直接は目指さない者が大半を占めるようになってきた。すなわち、幼稚園教員の2種免許を、卒業要件とは別にいわゆる「副免」として取得しようとする学生が受講生の中心になってきたのである。これらの学生は、小・中学校での教育実習は経験するが、幼稚園での教育実習は全く経験することなしに、幼稚園教員免許の取得が可能になるという制度上の実態があり、この問題を見逃せなくなってきた。もちろん、こうしたことは、小・中学校教員の免許のほかに高等学校教員の免許を取得する学生の場合にもあてはまることであり、必ずしも幼稚園2種免許取得者に固有の問題点ではない。しかし、幼稚園教育と小学校以上の学校教育とではさまざまな点で性格を大きく異にする<sup>3)</sup>ことや、本学卒業生の最近の就職状況から見て、高等学校教員に採用される者はごくわずかであるのに対して、2種免許取得者が幼稚園教員

（時限付き講師を含む）に採用される例は少なくないことなどの理由から、この問題点を放置できない状況になってきた。そのため、「幼児と環境Ⅱ」を受講する学生に、教育実習には及ばないとしても、園児との接触場面をより多く設定する必要が生じてきたのである。

以上のような問題意識から、平成16年度は、大学教員と附属幼稚園教員による前述テーマのプロジェクトを設定し、両者が連携を取りながら実践を進めることによって、「幼児と環境Ⅱ」を受講する学生が保育に参加する場面を設定する方向で授業改善を図るとともに、環境領域のねらいの達成度をいっそう高めることを目指すことにした。

「幼児と環境Ⅱ」の授業の中で保育参加の機会を設けることによって、受講生はたとえ幼稚園教員にならないとしても、幼児期の子どもの発達段階や幼稚園における保育のあり方などについて体験的に学ぶことになると期待される。また、受講生が本学卒業後にたとえば小学校教員になる場合を想定すると、小学校入学以前の子どもの状態や保育の過程などが体験を通して具体的に想起できる資質が備わることになり、教員としての力量形成に大いに貢献し得ると考えられる。

「幼児と環境Ⅱ」の受講者には、本学への入学時点ですでに幼稚園教員を目指す学生も少数ながら含まれる。彼らが保育参加の機会を得ることは、2回生の場合であれば、幼稚園での教育実習を比較的間近に控えて自覚を高めるとともに、園児の実態を体験的に学ぶ機会になるはずである。3回生以上の場合には教育実習の振り返りの機会となるため、彼らにとっても保育参加の機会を得ることは有益であると考えられる。

## 2. 「幼児と環境Ⅱ」の目的と計画

### 2. 1. 従来の授業の目的と計画

本学ホームページに掲載しているシラバスでは、「幼児と環境Ⅱ」の目的として従来次のように記述していた。

「(社会分野) 幼児の体の動かし方、遊び方、もの見方などを通して、幼児と環境との関係を具体的に考察する。実践例も取り上げたい。野外での諸活動も経験してもらおう。」

この目的に沿って、平成15年度の授業（受講登録者数35名）では、担当者の授業内容を下記のように講義と実習を組み合わせ構成し、季節の推移を勘案して展開した。

講義①：環境領域のねらいと内容、幼児・保育者・環境の関係

②：幼児の環境認識

③：幼児の国際理解

④：実践「焼き芋」の意義

実習①：附属幼稚園の観察

②：「芋掘り」（サツマイモ収穫体験）

③：「焼き芋」（落ち葉たき体験）

講義②で「幼児の環境認識」をテーマに取り上げたのは、幼稚園教育要領に示された環境領域の内容（9）「日常生活の中で簡単な標識や文字などに興味や関心をもつ」および内容（10）「生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ」の文言をそれぞれ意識し、計画したことによる。講義③で「幼児の国際理解」を取り上げたのは、内容（11）「幼稚園内外の行事において国旗に親しむ」を意識したことによる。また、実習①で「附属幼稚園の観察」の指導を実施していたが、学生に観察させたのは、附属幼稚園の物理的環境に関わる諸要素であった。すなわち、園児が遊び活動の場として接する「子どもの森」<sup>4)</sup>、遊具、土の山、砂場、保育室内の積み木などそれぞれの環境諸要素に注目させながら、担当者がその場で解説するという形態であった。保育の妨げにならないようにとの配慮のためでもあったが、園児のいない「子どもの森」や保育室を観察させ、実習というよりは実地講義の延長という性格のものであった。

実習②「芋掘り」、実習③「焼き芋」の活動を展開してきた意図は前述のとおりであるが、幼稚園教育要領に示された環境領域の内容（1）「自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く」、内容（3）「季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く」などを意識したものである。また、講義④も、環境領域の内容（1）および（3）を意識したものであり、「焼き芋」の活動が環境領域のねらいを達成するうえでどのような意義を持つものであるかを解説するという内容である。

平成15年度までの「幼児と環境Ⅱ」は、年度によって多少の違いはあっても、大枠は以上のような内容構成で展開してきた。その特徴は、幼稚園教育要領に示された内容を比較的満遍無く取り上げるものであった。そして、平成13年度までは、学生のレポートや授業評価アンケートの結果などから総合的に判断して一定の成果を挙げてきた、と自己評価してきた。

## 2. 2. 平成16年度の目的と計画

平成14、15年度の試行錯誤期ともいべき過渡期を経て、平成16年度のプロジェクトでは、保育参加や「焼き芋」を通した園児との交流機会を確実に設定することによって、「幼児と環境Ⅱ」の授業を、教員を目指す学生の実践的力量を高めることに重点を置く方向にした。授業改善の基本的方針は次のとおりである。  
ア。「焼き芋」を通した園児との交流を授業全体の柱に据える。

イ。講義形式の授業展開は、「焼き芋」に関わる内容に絞り、必要最低限にとどめる。

こうした方針に沿って実施した、平成16年度の授業（水曜日3・4限実施、受講登録者数21名）の展開を講義と実習に分けて示すと下記のとおりである。

講義①：環境領域のねらいと内容、幼児と保育者・環境の関係

②：実践「焼き芋」の意義、「焼き芋大会」の準備について

実習①：「芋掘り」（サツマイモ収穫体験）

②：附属幼稚園の観察

③：保育参加打ち合わせ、練習、発表

④：保育参加（絵本読み聞かせなど）

⑤：「焼き芋大会」（落ち葉たき体験）

平成16年度の計画では、これまで講義形式で取り上げてきた「幼児の環境認識」および「幼児の国際理解」の内容を全く取り上げないこととし、その分空いた時間を保育参加およびその打ち合わせ・準備に充当させた点が、大きく変更させた部分である。また、これまで実施してきた附属幼稚園の観察は、観察対象を保育参加に関わるものに変更させるなど大幅に改善させることにした。幼稚園教育要領に示された環境領域の内容との関連では、従来の計画と比較して内容（1）「自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く」、内容（3）「季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く」に焦点化させる計画となっている。全体としては、「焼き芋大会」が学生による全活動のクライマックスになるように設計し、その他の講義や実習は、全て「焼き芋大会」に収斂されるように配置した点が特徴となっている。平成16年度の計画で新たに加えた内容でもっとも特色になる内容は、正味わずか30分にも満たない活動であるが、保育参加である。

なお、「焼き芋大会」という呼称は、催しのイメージについて園児や保護者の理解を得やすくするために採用したものであり、「焼き芋」はサツマイモを落ち葉で焼く活動一般または焼き上げたサツマイモのことを指している。

保育参加では、次のことを園児に行い、働きかけるという課題を学生に持たせる計画にした。

- ・自己紹介
- ・絵本の読み聞かせ
- ・次の週に実施する「焼き芋大会」に園児を招待する（招待状をひとりひとりの園児に手渡す）
- ・「焼き芋」に使用する落ち葉を園児にも集めてほしいこと

これらの課題の中で、園児に読み聞かせを行う絵本は「焼き芋」を題材にしたものを取り上げることにしたが、このことによって、次週に行われる「焼き芋大会」への参加意欲を高めることを意図したものである。園児に落ち葉を集めることを依頼することも、落ち葉を集める活動に園児が取り組む場面を設定することに

よって、「焼き芋大会」に主体的に参加する動機を高めようと意図したものである。招待状は、学生が一枚一枚手書き（手描き）で制作したものを用意することとし、制作した学生の名前を記入しておくよう担当者が指示したものである。「焼き芋大会」当日は、学生の首から吊り下げられたカードに記入された名前を園児が保護者とともに探すという想定をした。ひとりひとりの園児がこの招待状を受け取ることにより、「焼き芋大会」への園児の参加意欲が高まることを期待したものである。

保育参加は、21名の学生が附属幼稚園の全5クラスに分かれてグループで取り組む計画とした。保育参加がスムーズに進行するためには、保育案の作成、絵本の読み聞かせの練習をはじめ、学生は事前に準備しておくべきことがいくつかある。これらは、クラス担当グループごとに行うことになるが、保育参加の前週の授業時間に取り組んでもらう計画とした。また、附属幼稚園観察の目的は、担当するクラスの園児の実態や保育室の環境全般を把握することと同時に、絵本の読み聞かせを練習するための「手本」を得ることが最大の目的となるよう計画をした。すなわち、附属幼稚園の教員が各クラスで絵本の読み聞かせをする場面を学生が確実に観察できるよう予め附属幼稚園側に依頼しておき、観察の目的が達成されるように計画した。

### 3. 附属幼稚園の環境領域に関わる保育目的・計画

平成16年度「幼児と環境Ⅱ」の授業改善の方向性は、附属幼稚園の保育計画推進にどのように寄与できるのだろうか。附属幼稚園が2001年に作成・発表した『教育課程』をもとにこの点を検討したい。

附属幼稚園の『教育課程』は、1年間をⅠからⅤまでの5期に区分したうえで、年齢別に各期で「子どもの姿」、「ねらい」、「経験内容」、「環境構成と援助のポイント」、「家庭との連携」の各項目についてまとめたものである。

5歳児の場合、Ⅳ期（10～12月）では、秋から冬にかけての環境領域とくに野外の自然に関して、次のように記述している。

- ・子どもの姿：落ち葉や木の実を使って遊んだり、たき火をしたりすることを通して、自然に対してはたらきかけ、遊びや生活の中にとりいれていく姿が見受けられる。
- ・ねらい：友達と一緒に、協力したり工夫したりして遊びを進めていく楽しさを味わう。自分なりの課題をもって、いろいろな活動に取り組もうとする。
- ・経験内容：さまざまな自然物を使った遊びを楽しむ中で季節の変化に気付く。
- ・環境構成と援助のポイント：木の葉や木の実、草花の種子などを集めたり、それで遊んだり、分類したりできるような容器などを用意しておく。また、時

には園外に散歩に出るようにし、園内外の自然に親しませるようにする。

これらの記述から、「落ち葉」や「焼き芋」に園児が接することは、附属幼稚園がねらっている季節に関わるさまざまな体験と深く関連し、合致することがわかる。したがって、「幼児と環境Ⅱ」で実施する「焼き芋大会」に園児が招待され参加することは、附属幼稚園の保育計画と整合性を持つことになる。また、絵本の読み聞かせに関しても、経験内容のひとつに「絵本やお話に親しみ、興味を持って聞いたり自分のイメージをふくらませたりして遊ぶ」という記述もあり、保育計画に沿ったものであるといえる。

### 3. 「幼児と環境Ⅱ」の実践経過

ここでは、平成16年度「幼児と環境Ⅱ」（10月、11月）の実際の展開がどのような経過をたどったのかを、10月27日に実施した附属幼稚園観察以降の「実習」の部分を中心に、スケジュールに沿って具体的に述べる。授業に関わる学生の活動をできるだけ具体的に記述するとともに、関連して幼児の動きも取り上げる。また、学生や園児の動きと関わって担当者と附属幼稚園教員との間でどのような協議を行い、連携を取っていったかについても述べたい。

#### 3. 1. 附属幼稚園観察（10月27日）

学生は10：45に附属幼稚園に集合し、担当者による出欠確認後、早速各保育室の前に分かれて立ち、観察に入った。

この時点で、担当者と附属幼稚園教員との間では、11月17日に学生が保育参加に入ること、11月24日に学生が「焼き芋大会」を実施し、園児が招待されることの2つは大枠として事前に協議が済んでいた。また、前の週の10月20日授業時に、21名の学生はそれぞれ、11月17日の保育参加に入るクラスを担当の岩本によって割り振られており、観察をする前に担当するクラスが決まっていた。保育参加するクラスを担当者が一方的に決めてしまうのは、学生の希望など全く考慮しないことを意味するが、これはやむを得ないことであろう。2か月間で完了する1週間に1回の授業の中で保育参加を計画していく場合、学生の希望調査をもとに割り振りの調整を図る時間的余裕がないためである。

水曜日における附属幼稚園での園児の生活は、午前9時から10時半までが自由保育（「好きな遊びの時間」）の時間であり、学生が観察を始めたときは園児が各保育室に戻って、担任の教員による指導が始まろうとするときであった。担当者は、学生が観察するに当たって次のようないくつかの観点を事前に示していた。すなわち、①自分の担当するクラスの保育室の位置および担任教員の顔を確認すること、②担当するクラスの

園児の様子や保育室の環境設定などを確認すること、③担任教員が絵本の読み聞かせをする場面を注意深く観察し、学生が絵本の読み聞かせをする際の参考にするとともに、読み聞かせに対する園児の反応を確認すること、の3点である。ただし、観察に当たっては、担任教員の指導の妨げにならないよう十分に注意し、保育室の外側から室内の園児や担任教員の様子を観察することになった。3～5歳の園児がすべて降園したのは、正午頃であったので、正味60分間ていどの観察であった。

この日の観察は、あたかも表面をなでるだけのようなものであったかもしれないが、学生の中には附属幼稚園に足を踏み入れること自体が初めての者が多く、園児の集団を間近に見るのは自身の幼少時以来という者もあった。したがって、提示された課題は初歩的な観察であったとしても、保育参加するクラスが事前に決められていることもあり、学生にとってはきわめて大きな意義を持つものと考えられる。学生は、担当するクラスの園児を目の当たりにすることによって保育参加への心構えを確実に形成することになるからである。

### 3. 2. 保育参加打合せ、練習、発表 (11月10日)

講義棟でのこの日の授業で学生にグループごとに取り組んでもらったことは次のとおりである。

ア. 11月17日の保育略案の作成 (用紙に記入)

イ. 絵本の読み聞かせの進行打ち合わせと練習

ウ. 絵本の読み聞かせの模擬発表

以上のほかに、保育参加と「焼き芋大会」の際に学生の首から下げてもらふ名札を作成してもらふこと、保育参加の際に学生から園児に手渡す招待状が的確に制作できているかどうかを担当者が確認すること<sup>5)</sup>、「焼き芋大会」で使用されるアルミホイルやバケツなどの物品の用意について確認すること、など関連事項を担当者がいくつか取り上げた。

保育略案については、4人の学生からなるひとつのグループ(代表者:A学生)が作成した事例を以下にほぼ原文どおりに示す(学生の氏名は記号でしめした)。

- |   |   |
|---|---|
| 1 | 自己紹介(1人ずつ、簡単に)、大学から来た○○です。今日はよろしく、など。   |
| 2 | 絵本読み聞かせ(『ばばあちゃんのやきいもたいかい』、B学生)          |
| 3 | 焼き芋大会の予告(わかりやすく、簡単に、C学生)                |
| 4 | 落ち葉集めのお願い、袋渡し(11月22日に取りに来ることも伝える、D学生)   |
| 5 | 招待状手渡し(子どもが騒がしくなりそうなので最後に渡す、4人の学生から個々に) |
| 6 | さようなら                                   |

絵本の読み聞かせについては、「焼き芋」に関わつてどのような絵本を選択するかが大きな問題となる。この点は、10月27日に担当者と附属幼稚園教員との間で行った協議でも問題になったことで、学生の力量形成を目指すうえでは、絵本の候補選択段階から学生に研究させるべきであるとの意見も出されていた。しかし、前述のように時間的余裕が十分でないこともあり、附属幼稚園の各担任教員に絵本の選択を委ねることにした。11月初旬をめどに読み聞かせで使用される絵本を決定・受け渡ししてもらうこととし、その結果、次の絵本が選択・採用された<sup>6)</sup>。

- ・3歳児クラス(もも組):『ノンタンふわふわほあん』偕成社
- ・4歳児クラス(あか1組):『さつまのおいも』童心社
- ・4歳児クラス(あか2組):『おなかぼこぼこ』P H P 研究所
- ・5歳児クラス(き1・2組):『ばばあちゃんのやきいもたいかい』福音館

選択された絵本は、いずれも「焼き芋」が題材になっており、「焼き芋大会」への園児の参加意欲を高めることが期待されるものばかりである。

11月10日の授業では、用意したこれらの絵本を各グループに手渡し、保育略案の記入が済んだグループからそれぞれ読み聞かせの練習を進めさせた。

読み聞かせの模擬発表は、各グループがどのような絵本を扱っているか共通理解を図ることと、わずかな時間とはいえ読み聞かせの練習成果を同じ受講生の前で発表してもらふことを意図し、グループごとに実施してもらった。保育参加の「本番」を翌週に控えているためであると思われるが、全学生がグループごとの発表および他グループの発表の視聴に真剣に参加した。模擬発表の機会を設けたことによって、学生の保育参加への自覚は高まったものと思われる。

### 3. 3. 保育参加 (11月17日)

10時45分に附属幼稚園へ集合した学生の出欠確認後、11時から30分以内の予定で、学生は各クラスにグループごとに入り、保育参加を行った。各クラスでは、担任教員の指導によって園児が座って待機している状態で、先に示したような保育略案にしたがい、学生グループは保育参加の活動に移っていった。

3歳児クラスの場合、まず学生5名が園児の前に立って自己紹介を行った。学生の中には、園児の識字力の実態を考慮し、名前を示すひらがなのほかに関連する絵を付けるなど工夫している例も見られた。

次に、5名の学生のうちひとりが『ノンタンふわふわほあん』の読み聞かせを行った(写真1)。その際、残りの4名は推移を見守るだけでなく、絵本のストーリー展開の中で「ふわふわほあん」と読み手の学生が



写真1. 保育参加場面「絵本の読み聞かせ」

読むときに「振り」を付ける工夫をしていた。これは、絵本の読み聞かせ手法として適切であるかどうかは別として、読み手以外の学生も何らかの形で読み聞かせに参加しようという意欲・工夫の表れであると評価できよう。

絵本の読み聞かせに続いて、翌週の水曜日に「焼き芋大会」を実施し、園児を招待することや「焼き芋」に使う落ち葉を集めておいてほしいことをふたりの学生が分担して園児に話した。その際、事前に用意した本物の落ち葉を見せながら説明する工夫をしていた。また、集めた落ち葉を入れるビニールを見せ、担任教員に渡した。なお、「翌週の水曜日」という表現は園児に伝わらなかったようで、担任教員が「あと7回寝たら」という言い回しで説明しフォローしていた。

保育参加の最後に、学生から招待状を園児ひとりひとりに手渡した(写真2)。園児は「宝物」でももらったかのように喜びの表情を示す者が多かった。招待状を受け取ったある園児が、招待状は家に持つて帰るのか?という意味の質問を担任教員に投げかけていたが、それに対して担任教員は、保育室ロッカーの道具箱の下のほうに「なくならないように大切に」保管しておくように指示していた。



写真2. 保育参加場面「招待状手渡し」

### 3. 4. 「焼き芋大会」(11月24日)

「焼き芋」の際、学生は原則としてふたりでひとつ、落ち葉を活用したたき火を起し、10月13日の「芋掘り」以来保管しておいたサツマイモを焼く活動を行った。「焼き芋」を実行するために何をを用意するかは担当者が下記のように指示した。

- ・落ち葉(たき火ひとつあたり45リットル入りビニール袋5袋でいど、これに園児の集めた分が加えられる)
- ・サツマイモ(予め洗っておき、アルミホイルで包んでおく、大きなものは園児が食べやすい大きさに切っておく)
- ・汚れてもよい服装・履物、軍手、タオル、頭にかぶるものなど一式

学生に「焼き芋」の体験がすでにあれば、用意すべき物を学生の判断に委ねることができようが、実際はほとんどの学生に体験がなく、失敗はできないため具体的に指示した。とくに、必要な落ち葉の量は体験しないと全く見当もつかないため、きわめて具体的に指示することになる。

また、落ち葉は日程的に余裕を持って事前に集めておかないと、「焼き芋大会」当日朝まで降雨があった場合対応できないということを学生に説明している。サツマイモの場合に関しても、園児の実態を把握していない学生の場合、成人向けの大きさのまま焼いてしまうことがあり、具体的な目安を示す必要がある。服装についても具体的に指示しておかないとスカートで参加する者が以前にあったことを考慮した。以上のほかに、たき火の点火に用いるマッチと新聞紙、消火に使う水を入れるバケツをたき火ごとに用意するよう指示した。また、落ち葉以外の燃料として使う板きれ、火箸は担当者がまとめて用意した。

「焼き芋大会」は、本学図書館北側の空き地(林)で行った。当日の学生の活動は、10:40頃からたき火の準備を開始し、準備できたところから点火した後はしばらく落ち葉を燃やし続け灰をためていった。点火後20分ほど経過した頃に、アルミで包んだサツマイモを灰の中に入れさせた。こうした一連の手順は、具体的に担当者が説明をした。

いっぽう、附属幼稚園側には、3歳、4歳、5歳の園児が時間差を置いて、先頭の園児が11:30頃に到着するよう依頼しておいた。また、「焼き芋大会」の日は降園ルートが通常と異なることを事前に同伴の保護者に伝えることも依頼していた。したがって、保育参加なしで「焼き芋大会」に招待するだけでも附属幼稚園教員と事前調整すべきことは多いことがわかる。

11:30頃に計画どおり先頭の3歳児園児がたき火付近に到着すると、園児は保護者とともに、招待状に記入された学生の名前を探し、見つけた園児は学生から焼き上げたサツマイモを受け取った(写真3)。保護

者もサツマイモを受け取った。その後の園児は、たき火に興味を持って再度近寄ってみる、付近を走り回るなどさまざまであった。また、保護者も、園児と一緒にたき火に近寄る場合や離れて様子を見守る場合などさまざまであった。

4歳、5歳と園児が順次到着し、すべての園児にサツマイモが振舞われた後は、学生がたき火を消火し、片付けて「焼き芋大会」は終了した。



写真3.「焼き芋大会」場面

#### 4. 実践の考察

##### 4. 1. 園児と保護者の視点から

「焼き芋大会」当日の降園前に、附属幼稚園教員を通して保護者にアンケート用紙を配布した。依頼文は担当者名で作成したが、回収の便宜上、記入した用紙は附属幼稚園に提出するよう依頼した。保護者にアンケート用紙への記入を依頼したのは、ひとつには園児に回答を求めることが困難なためであるが、「焼き芋大会」は結果的に保護者への啓蒙にもなりえる性格を持つと考えられるためである。

アンケートの設問は、担当者が原案を作成し、附属幼稚園教員側で意見を加味し修正したもので、骨子は下記のとおりであり、無記名での回答を求めた。

- 1 園児および回答者の属性
  - ・園児の学年（3歳、4歳、5歳）
  - ・園児の性別（男、女）
  - ・回答者の属性（母親または父親、祖父または祖母、その他）
- 2 当日の降園時に、お子様は焼き芋大会のことを楽しみにしていましたか。（ひとつ選択）
  - ア. 楽しみにしていた
  - イ. どちらかという楽しみにしていた
  - ウ. 普通
  - エ. どちらかといういやがっていた
  - オ. いやがっていた
  - カ. その他

3 前記2に関して、当日の降園時にお子様がどのようなことをお話しされていたかをご記憶でしたら、具体的にご記入いただけますでしょうか。（自由記述）

4 あなた（回答者）は、たき火で焼いた焼き芋を食べたことがありますか。

- ア. 小さい頃食べたことがある
- イ. 最近食べたことがある
- ウ. 食べたことがなかった

5 焼き芋大会で学生と接したことや焼き芋を食べたことなどに関して、お子様の声や反応など、どのようなことでもけっこうですので、具体的に記入いただけますでしょうか。そのほかにお気付きのことやご同伴の方ご自身の感想などございましたら自由に記入していただくと幸いです。（自由記述）

アンケートへの回答数は、3歳児クラスでは15（回収率62.5%）、4歳児クラスでは22（回収率32.4%）、5歳児クラスでは20（回収率29.4%）であった。回答割合は3歳児の場合過半数に達しているが、年齢（学年）が上がるとともに減少したことから、「焼き芋大会」への関心は3歳児の保護者をもっとも高かったと考えられる。4歳児の相当数と5歳児はすでに「焼き芋大会」に招待された経験があるのに対して、3歳児は初めてであったことがその理由であるとも考えられる。なお、回答者の属性に関わる他の項目で、園児の性差による回答の多少はとくに認められなかった。また、回答者は大部分が母親であった。

問い2の「当日の降園時に、お子様は焼き芋大会のことを楽しみにしていましたか。」という設問は、園児が「焼き芋大会」に向かうときの気持ちがどのようなものであったかを尋ねたものである。回答は、どの学年も「楽しみにしていた」がもっとも多く、3、4、5歳全体で「楽しみにしていた」という回答が80%以上を占め、「どちらかという楽しみにしていた」まで加えると、約96%に達していた。限られたデータからではあるが、このことは、園児の意識の中で「焼き芋大会」に参加するという自覚と喜びが明確になっていたことを表しているものと思われる。また、前週の学生による保育参加で「焼き芋」に関する絵本の読み聞かせが行われたこと、招待状を受け取っていること、その後落ち葉を集めたことに加えて、担任教員による巧みな動機付けがあったことなどが総合的に作用した結果であると考えられる。

問い3「当日の降園時にお子様がどのようなことをお話しされていたかをご記憶でしたら、具体的にご記入いただけますでしょうか。」という自由記述を依頼した意図は、先の問い2に関わって附属幼稚園を出発後の「焼き芋大会」に向かうときの状況を問うたものであった。その結果、問いの意図に対応するものとして、全体の約54%に当たる31件の記述が得られた。た



だし、問いの意図が必ずしも伝わらず、回答が「焼き芋大会」後の園児の感想などを記述したのも17件(約30%)あった。この背後には、「焼き芋大会」前は集団で降園してきたのに対して、その後自宅に向かう際は保護者と園児のみでの降園となり、より間近に会話を交わすことが可能になったという事情があったと考えられる。

問い3に関する記述で目立ったのは、「焼き芋グーチーパー」の歌を歌いながら「焼き芋大会」に臨んだ園児が多かったことである。これは、附属幼稚園教員の日頃からの指導・動機付けが成功していることを示しているといえる。また、園児が事前に招待状をもらっていることに触れている事例も多く、これも「焼き芋大会」への参加動機を高めたことに十分に寄与したことがうかがえる。

以下に問いの意図に沿った記述の代表的な事例を示す。

事例1 (3歳児、男) :

招待状をいただいていたので、朝から天気を気にして雨がふらないことをしきりにお願いしていたほど楽しみにしていましたので、どこで作っているのか、誰からもらうのか、ずっと先生や親と話しながら歩いてきました。手作りの招待状は嬉しかったらしく、家に飾っています。

事例2 (3歳児、男) :

焼き芋グーチーパーの歌を歌っていた。「焼き芋早く食べたい」と言っていた。

事例3 (4歳児、男) :

「今日はおねえさんが招待状をくれたから焼き芋大会に行くだね。」と嬉しそうでした。「焼き芋グーチーパー」と歌っていました。

事例4 (4歳児、女) :

「お兄ちゃんが焼き芋のチケットくれはってんで。」と嬉しそうに話してくれました。

事例5 (5歳児、女) :

幼稚園のほうで「焼き芋グーチーパー」の歌を歌っていたので、気持ち的に盛り上がり、招待状をくださったお姉さんの名前を一生懸命探してそれもゲームみたいで楽しそうでした。

事例6 (5歳児、男) :

幼稚園の先生から今からどこへ何をしに行くかという話をさせていただいたので、何を話すということもなかったが、その気持ちが歩き方や話すスピードに表れていたのが、楽しみにしているんだなあと感じました。

問い4は保護者の「焼き芋」に関する先行経験を問うたものである。回答の約53%を占める30名が「小さい頃食べた」と回答している。「最近食べた」は9名、「食べたことがない」は15名であった。無回答も3名あった。ただし、「最近食べた」という回答について

は、4歳児と5歳児の保護者の場合、前年度までの「焼き芋大会」での経験との区別が判然としなかったため、実態は不明である。しかし、大学での「焼き芋大会」での経験を除くと、多くの保護者が、「小さい頃食べた」または「食べたことがない」に該当することになるといえる。こうした先行経験の違いが、次の問い5での全般的な感想に関連していることが明らかにもあった。

問い5は全般的な感想や意見を保護者に求めたものである。回答者の大部分に当たる54件の記述が得られた。全般的には、園児が「焼き芋大会」に参加したことを好意的に受け止めていることがわかる<sup>7)</sup>。ただ、5歳児の場合は、「焼き芋大会」への参加が2度目または3度目となるため、3歳児の場合とは、受け止め方が異なっている面が見られた。また、4歳児の場合も母集団全体の半数以上は初めての経験のはずであるが、属性を問う際に3歳からの入園であるかどうかを区別しなかった担当者側の見通しが甘かったことが悔やまれる。いずれにしても、3歳児は、兄弟関係で経験がある場合は別として、「焼き芋大会」への参加が初めての保護者が多く、それだけに驚きや新鮮さを感じたという記述がいくつも見られた。いっぽう5歳児の場合は、園児も含めて保護者に「焼き芋大会」の先行経験があるため視野が広がり、大学の附属幼稚園ならではの催しであること、本学キャンパスの恵まれた自然環境だからこそ可能なこと、この催しを今後も継続してほしい、など余裕を持った客観的な見方に基づく感想がやや増えている。中には、大学の授業評価的な面にまで踏み込んで記述している例もあった。

以下に問い5に関する記述の代表的な事例を示す。

事例7 (3歳児、男) :

子供は実際に焼き芋を作る過程を見るのが初めてのことでしたので、まずもくもくと上がる煙に驚き、目が痛くなることを体験し、できたての焼き芋をいただいて熱々としながら食べることに集中。興味のあることで本当に楽しんでいました。おうちでも同じようにしてと言っていました。学生の方に直接いただくというのも嬉しかったようです。(以下略)

事例8 (3歳児、男) :

私の子は好き嫌いが多く、電子レンジや蒸し器で作ったサツマイモはあまり食べないのに、今回作っていただいた焼き芋はベロリと食べて親の分までほしがって食べたのでびっくりしました。紅葉した木々の中、学生さんやお友達とお話しながらいただいた焼き芋は格別においしかったです。

事例9 (4歳、男) :

帰りも、ずっと焼き芋の歌を歌って上機嫌でした。家でたき火をできる環境ではないので、大学での「焼き芋大会」が毎年楽しみです。子供は、焼き芋



のお姉ちゃんが教生の先生になって来てくれるの？  
と家に帰って言っていました。

事例10（4歳児、女）：

招待状をもらった、たき火の葉っぱ集めをした、等々、焼き芋大会の前の週から逐一報告があって、本当に楽しみにしていたようです。両手を真っ黒にしながら熱いお芋を素手で触っていた学生さん方、お疲れさまでした。学生さんが、本の上からではなく、実際に体を使って子供達と接し、気持ちをつかむということはとても大事だと思います。来年以降も続けてほしい授業（「幼児と環境Ⅱ」のこと、担当者補筆）です。

事例11（5歳児、女）：

「焼き芋大会」へは、昨年と今年の2回参加させてもらったのですが、子供も私も楽しみにしていました。私自身が小さい頃、数回？したかなという記憶で、大人になってからは近所で見ること、当然、自分達ですということもなかったの、子供に焼き芋は落ち葉を集めてこうやってすることもあるんだよ、昔はそうしていたんだよ、と見せてあげるにはとてもいいことだと思いました。（以下略）

事例12（5歳児、男）：

学生さん達が子供達に対して笑顔で楽しく接してくれたので、子供本人達も話しやすかった様で、その場からなかなか帰ろうとしなかった姿がとてもよかったです。こういう場をもっと作ってほしいと思いました。

## 2. 学生の視点から

学生には、「焼き芋大会」終了後、「保育参観、保育参加、焼き芋大会の体験を通してあなたが幼児教育に関して考えたことを具体的に述べよ」という課題でレポートを作成するよう担当者が指示した<sup>8)</sup>。保護者へのアンケートとは異なり、記名が不可欠な学生のレポート記述から公正な授業評価をすることは困難であるが、少なくとも、附属幼稚園の観察、保育参加、「焼き芋大会」という一連の取り組みからどのようなことを学んだかという質的な側面を読み取ることは可能であろう。

ここでは、2事例のみであるが、授業での諸活動を通して学生の学んだ質的な側面がもっとも端的に記述されているレポートを全文紹介し、ここから読み取れることをいくつか指摘しておきたい。

事例13（2回生女子）：

わたしは、幼児教育が子どもたちに与える影響は、とても大きいと思っている。幼稚園や保育園でのうれしかった・楽しかった思い出、逆に、嫌だった・恥ずかしかった思い出が、自信や、またはトラウマになって、子どもたちの人生を左右することもあると思う。保育者はそのことを十分に意識して子どもと接する必

要がある。

附属幼稚園の保育参観をさせてもらって一番感じたのは、先生（保育者）は子どもたちの心をつかむのが本当に上手だということだ。おやつにも、絵本の時間にも、子どもたちは先生の動きにすごくよく注目をしていて、話もちゃんと聞いていた。絵本の読み聞かせを始める前の先生の適切な働きかけによって、子どもたちが、絵本を見る前から物語に興味をもち、お話の世界に引き込まれている様子が、窓越しにも感じられた。「今日は先生、どんなお話をしてくれるんだろう」という期待が、子どもたちにはあるのだ。これは子どもたちと先生との、普段からの信頼関係があるからこそだと思う。信頼関係がなければ、教育は成り立たない。幼児教育に関しては、特にそういえるのではないだろうか。幼児をとりまく環境はごく身近な人やものに限られているため、保育者と子どもとの信頼関係、そして親や家族、先生の愛情が、絶対に必要である。また、先生の教育（保育）能力の質・高さを目の当たりにして、改めて「教職」について考えさせられた。教師になるためには、相応の技や能力が要求される。絵本の読み聞かせの仕方一つを取っても、声の強弱や抑揚、顔の表情など、真似したいところがたくさんあった。附属幼稚園の先生方は（現職の先生だから当たり前だが、）まさにプロであった。

わたしたちが絵本の読み聞かせをさせてもらえると聞いたとき、最初は「おもしろそう、子どもたちと関われるなんてうれしい」くらいにしか思わなかったが、読み聞かせの練習をしたり、招待状を作ったりするうちに、ただ絵本を読むのではなくて、子どもたちの記憶に少しでも残る保育にしたいと考えるようになった。読む作業はグループのほかの一人に任せることになったが、残り3人で子どもたちが絵本を楽しめて、焼き芋大会に来たいと思えるような雰囲気を作りたいと思った。当日、子どもたちを見ていると、みんな絵本と読み手に注目してよく聞いてくれていた。「これは何かな？みかんを焼いたらどうなると思う？」といった、こちらからの問いかけにも素直に反応してくれてとてもうれしかった。先生のようにスムーズに読み聞かせを進めることはできていなかったと思うが、ある子が「(わたしたちが)4人いるねんからあと3つ絵本読んで」といつてくれたので、わたしたちのつたない読み聞かせを楽しんでくれたようで本当にうれしかった。また、読み聞かせを始める前や、招待状を渡すとき、落ち葉集めのお話のとき、子どもたちとさよならをするときなど、わたしたちの進行が上手くいかないときは先生が的確に手助けしてくださって、感謝するとともに、「さすが先生・・・」と感心させられた。附属幼稚園の先生のように、サポートがなくても子どもたちの心をしっかりとかめようになりたいと思った保育参加だった。

焼き芋大会当日は、晴天のうえに風もほとんどなく、焼き芋日和だった。室内保育と違って、野外での保育は天候に左右されるし、けがや危険も増す。焼き芋の焚き火の近くに、小さな崖のようになっているところがあったが、子どもたちが遊んでいて落ちたりしなくてよかった。子どもたちに焼き芋を渡すとき、熱いから気をつけてと声をかけることを忘れないようにした。保護者の方にも、やけどに注意してもらうようお願いした。子どもたちの安全に配慮することは、幼児教育には欠かせないことであると思う。

保育参観、保育参加、そして焼き芋大会という取り組み全体を通しては、準備の大切さをとても感じ、考えさせられた。幼稚園側との交渉ややり取り、打ち合わせなども、ずっと以前から何度もされていたはずである。また、焼き芋大会を行うまでに、実際の子どもの様子を見て接しておくことは、子どもたちにとっても、わたしたちにとっても必要なプロセスであったと思う。なぜなら、保育参観と保育参加、二度ほどしか顔を合わせていなかったのに、わたしたちをちゃんと覚えていてくれた子もいたからだ。わたしが顔を覚えていた子も来てくれて、「落ち葉拾うの大変やった？」などの会話もできたが、初対面ではこうはいかないだろう。読み聞かせや招待状渡しなどの交流によって、子どもたちの記憶に残る触れ合いができていたということではないだろうか。また、焼き芋をする焚き火のための落ち葉を集めておくことも、必要な準備の一つであった。万一、足りなくならないように多めに集めていたので、燃やしすぎなどを心配することなく落ち葉を使うことができた。実際焼き芋が終わってみると、わたしたちのグループではゴミ袋半分ほどの落ち葉が残っていた。一袋余るくらいかと考えていたが、やはり多めに集めていてよかったのである。前もって見通し・計画性をもって準備をすることで、保育が円滑に進められることを実感した。もちろん、当日の様々な場合をどれだけ想定しても、相手は子どもや自然であるから、実際は思わぬ行動や反応、アクシデントがつきものである。しかし、できるだけ準備をしておくことで、保育者は気持ちに余裕をもつことができると思う。質のよい教育・保育を実践するためには、保育者側の準備が絶対に必要であると考えさせられた。

なにげない会話のやりとりでも、子どもはこちらの反応をよく見ていて、「話をちゃんと聞いてくれるからこのお兄さんともっと話したい」とか、「話をちゃんと聞いてくれないからこのお姉さんに話しかけるのはもうやめよう」などということを常に考え、感じていると思う。子どもは自分の気持ちを素直に態度に表す。好きな人には相手をしてほしくてちょっかいを出したり、嫌いな人には全く近づかなかったりする。附属幼稚園の子どもたちでも、グループのうち一人ばか

り叩きにきたり、ずっとほかの一人のそばにいたり、わたしによく視線を向けていた子がいたり様々であった。(大人にもいえることかもしれないが、特に)幼児の好みというのは、外見だけではないと思う。きっと、わたしたちの表情や雰囲気などから、無意識のうちにも自分の接したい人間かを判断している気がする。子どもたちは人の中身・人格を、見る・感じ取ることができるのではないだろうか。保育参観、保育参加、焼き芋大会という取り組みを通して、そのことをより感じた。

子どもたちは、焼き芋を本当においしそうに食べてくれた。焼き芋はもちろん楽しいイベントだが、それだけではなく、わたしたちが取り組んだ焼き芋大会は、幼児と教育大学の教師・学生との交流であり、立派な幼児教育の一環である。遊びで取り組んでいるのではなく、わたしたちは授業の一環、教育の一環として、子どもたちと接する機会を得ることができた。この経験を、きっとこれからは生かしたいと思う。

子どもたちと実際に接することができて、本当に有意義で楽しい体験ができた。この幼児と環境Ⅱでの授業に関わることができたのは本当によかったと思う。

#### 事例14（4回生男子）：

私は、3歳児のクラスを見学させて戴いたが、最初の3歳児にもつイメージは、言葉も単語単語でしか話せなくて、先生も、身振り手振りで教育にあたっていたかなければならないのだろうなと思っていた。しかし、保育参加や保育参観、焼き芋大会を通して、3歳児でも意外と会話が成立し、また、子どもひとりひとりに個性が芽生えはじめていることが分かった。例えば、3歳児でも積極的に接して来る子もいれば、恥ずかしがってなかなか近づいて来れない子もいるのだ。とはいってももちろん、我々大人よりは、感情をどンドンぶつけてくる。ただ、注意しなければならないと思ったことは、私達は、幼児を見たときに、かわいいという思いを常に抱いてしまうのだが、幼児間での関係は、想像以上にシビアであるケースもあるはずなので、注意深く接していく必要性も感じた。絵本の読み聞かせをしたときにも予想していたのと違った反応が幼児から返ってきたので驚いた。私が、予想したイメージは、「1. 黙って静かに聞いている」「2. 立ち歩いて絵本に目を向けない子がいる」というものであったが、予想以上に反応がよく、絵本の中のフレーズの一つ一つにきちんと反応を返してくれた。実際の3歳児の印象は、私の中での5歳児くらいの印象であった。しかしながら、4歳児学級や5歳児学級を参観してみると、3歳児からほんとうに1、2年しかたっていないのかと思えるほどの成長をしている。つまり、幼児は、1日のうちに、私の想像を越える量の知識や想像力を吸

取していることになる。子どもは、大人と比べて感受性が豊かだといわれるが、それは、言い換えると、子どもの頃に得た知識は、将来、その人の軸になるともいえるだろう。その軸を培うのは、保護者や子どもを取り巻く周囲の環境、そして、先生である。先生が与える影響力は、想像をはるかに越えておおいといえよう。

焼き芋大会では、幼児一人一人の性格がよりよく見えた気がする。それは、みんな心では、焼き芋をほしいと思っていて、しかしそれを積極的にもらいにくる子や、ただ遠くから眺めていてほしそうに訴えかけてくる子、お母さんに頼む子等々、ほんとうにいろいろな子がいることが分かった。私は、自分からお芋を自分でもらいにくることができない子にお芋を渡しに行くよう気を配った。目をきらきら光らせて焚き火をみている幼児の姿を見たときにはじめて、指導者の真の喜びのようなものを感じた。こどもには、大人以上に感動できることが多いと思うが、真に感動できることは、幼児から大人まで実は共通のものなのではないかと思う。現に、私も、焼き芋をしたことは何回かあるが、改めて自分達の手で火をおこし、自分達の手で掘ったお芋を焼いて、そしてそれらの芋を皆で食べるという一連の作業すべてに感動があった。焼き芋ではなくても、例えば、綺麗な景色をみたり、動物に触れたり、美しい現象に出会ったときには、世代を超えた感動がそこにはあるだろう。教育者は、子ども達にそういったものを出来る限り提供してあげる必要があるだろう。そして、その中から、豊かな感性を身に付けていくものだと思う。そして、教育者に必要なことは、何がよくて何がいけないものなのかを瞬時に判断できるだけの状況判断力も必要であると思う。

今まで、保育者の仕事は、「楽しそう」という思いが大きすぎて、細部の状況まで目が向いていなかったが、保育者は、幼児とはいえど、幼児だからこそ、神経を研ぎ澄ましていなければならないことを今再度確認した。

先ほども述べたが、小さい頃に得た内面性は、将来揺ぎ無いものになることを私は思う。大人になってからも、人間は成長できるが、意識しない部分で、幼児期に得た何か働いている気がする。だからこそ、幼児を取り巻く環境を、より充実したものにしてあげなければならないだろう。よく、小学校のころが一番楽しかった、という人がいるが、それは、そのころに得た感動が一番大きいからではないだろうか。楽しいだけでもよくないし、つまらなくても学べない。大切なのは、感動から学ぶことではないだろうか。感動は、遊びの中にさえある。ただ、感動がどこにあるのか大人になると見えにくくなってしまっただろう。しかし、子どもを指導していくのは、厳密には大人しかいないのだ。だから、我々大人が子どもの視点になって、子

どものことをよく見通して環境に対して柔軟に配慮していかなければならないだろう。幼児でさえ、大人に感動を与えることができるんだ、私達大人が、幼児に感動をあたえられないはずはない。前半の幼児と環境Ⅱの授業を通して私は、そんなことを思った。模擬保育等、幼児と接する機会が今までなかったので、今回のこの体験自体が、私に大きな刺激と感動を与えてくれてうれしく思っている。

事例13の記述から、附属幼稚園の観察とくに教員が絵本の読み聞かせをする場面に接したことによって、教員の指導力の高さを目の当たりにしたことが率直に述べられていることがまず指摘できる。そして、このことは保育参加へのモデルとして機能していったことが読み取れる。教育実習の場合でも同じことであろうが、学生の保育参加を確実に実行させるには、事前に教員の指導現場を学生に見せることの効果はきわめて大きいことが改めてうかがえる。

次に、事例13の保育参加についての記述からは、附属幼稚園教員のサポートがあったとはいえ、学生が絵本を読み聞かせしたことによって園児が素直に反応したことへの喜びが率直に記述されていることがわかる。また、このことは、断片的な体験ではあっても、将来教員になろうとすることへの自信や見通しにまでつながっていることが読み取れる。附属幼稚園教員との事前協議の過程では、わずか30分にも満たない時間の保育参加ではたしてどれほどの効果が得られるのであろうか、という疑念も出されていたが、学生の記述からは、保育参加から学ぶものがきわめて大きいことがわかる。

事例13では、焼き芋大会に関する記述は必ずしも具体的ではないが、事例14では、園児の個人差にまで観察が及んでおり、すでに教育実習を経験していることからきているのであろう余裕のようなものが読み取れる。また、園児との接触から「指導者の真の喜びのようなものを感じた」と卒業を間近に控えた時期だからこそと思われる記述が見られる。「自分達の手で火をおこし、自分達の手で掘ったお芋を焼いて、そしてそれらの芋を皆で食べるという一連の作業すべてに感動があった」と述べるとともに、そうした感動を通して「豊かな感性」を子供は身に付けていくのではないかという教育の本質に迫る記述も見られる。また、「焼き芋大会」で用いたサツマイモは自分たちで掘ったものであるという喜びも記述されており、「芋掘り」からの連続性が重要であることもわかる。

他の学生のレポートには、授業評価に関連する記述もかなり見られた。その中には、「幼児と環境Ⅱ」での「体験参加型」ともいべき授業形態を支持するとともに、このことによって、他の幼稚園関連教職授業科目への理解が深まったという指摘をするものがあ

た。反対に、一連の活動を通して、他の講義中心の授業が教員になるために必要なものであるのかどうか疑問を持ったといったやや極端な見解を記す例もあった。

担当者にとっては、今回の一連の取り組みの背後で、従来講義で扱ってきた「幼児の環境認識」や「幼児の国際理解」といった幼児への基本的認識に関わる内容を全く取り上げることができなかったのは、いわば「苦渋の選択」だったのであり、他の講義との関連についてどのような道筋をつけるのか、という課題が残った。

## 5. まとめ

本報告では、本学で展開している授業科目「幼児と環境Ⅱ」を、附属幼稚園と密接な連携を取りつつ改善してきた立場から、「焼き芋」を通した園児と学生の交流を実現していった意図や経過を具体的に明らかにし、授業改善の背景や意義を述べてきた。要点をまとめると以下のとおりである。

「幼児と環境Ⅱ」の授業は、これまで講義と実習をバランス良く組み合わせ、幼稚園教育要領に示された環境領域の内容を比較的満遍なく取り上げる形で展開してきた。しかし、受講生の属性変化などを考慮し、平成16年度は、附属幼稚園との連携をより深めて、保育参加と野外活動としての「焼き芋大会」を軸に、学生の「体験参加型」授業へと特化させていった。その結果、学生が授業の中で学ぶ質的側面はきわめて充実したものになったことが、確認された。また、園児や保護者の「焼き芋大会」への受け止め方は、改善の余地を残すものの、概ね良好であり、幼稚園にとって環境領域のねらいが確実に達成されたことが明らかとなった。

しかし、教職専門科目のひとつとして「幼児と環境Ⅱ」のあり方を考えると、講義との関係などさらに検討していかなければならない課題が残った。また、この授業で学生が保育参加をすることが附属幼稚園にとってどのような意義があるのかについては、本報告では具体的に示すことができなかったため、この点も課題として残った。

## 付記

本報告の文責は岩本廣美にあることをお断りしておく。

## 注

- 1) 本学では、「幼児と環境Ⅰ」を毎年度前期に開講しており、幼稚園教員免許を取得しようとする学

生は、ⅠまたはⅡのいずれかを受講し、単位を修得しなければならない。学部の教育組織として幼稚園教育課程を設置していた平成10年度までは、「幼児と環境」を通年2単位で開講し、当該の学生は通年で受講していた。「幼児と環境」をⅠ、Ⅱに分け、それぞれ2単位で開講したのは、平成11年度教育学部の組織改革に伴うカリキュラム改革の一環である。

- 2) 附属幼稚園は、本学キャンパス内の南東の一角に位置しており、3歳児クラス1（定員24名）、4歳児クラス2（同68名）、5歳児クラス2（同68名）から構成されている。
- 3) 小学校以上の学校教育では、教育課程表にある教科などから編成される「時間割」にもとづき教科書を用いて授業が展開されていくのが一般的である。幼稚園では5つの各領域に対応させて保育の時間割を作成することはなく、教科書もない。あるひとつの活動が、複数の領域のねらいを達成するために展開されていることはごく一般的なことであり、初めから「総合的」である。小学校以上の各学校段階で生活科や総合的な学習の時間が設定されてきたことは、幼稚園と小学校以上の学校段階との差異がやや縮小してきた側面を持つと考えられる。
- 4) 敷地の西側約4分の1の面積を占める林の部分を、附属幼稚園では「子どもの森」と称している。サクラ（ソメイヨシノ）、スギ、アラカシ、グミなどの樹種からなる。附属幼稚園側は、ところどころに木製の小屋や遊具を設置している。
- 5) 招待状の制作に関わって学生に求めたものは、「焼き芋大会」実施の日時・場所などに関する最低限の情報が園児および保護者に伝わることと、「心を込めて制作する」ことの2点であり、作品としての巧拙は問わないことにした。招待状を制作するための用紙は、園児によってサイズのばらつきが出ることを避けるため、同一サイズ（タテ13.7センチ×ヨコ9.8センチ）の色画用紙を園児および附属幼稚園教職員数分、担当者が用意した。画用紙の色は6種類用意し、学生に選択させた。
- 6) 選択された絵本の中には、新たに購入する必要のあるものが含まれていたこともあり、該当絵本のうち購入・入手できるものはすべて、今回新たに注文した。
- 7) 一部ではあったが、園児の実態や大学の事情に無理解なためと思われる意見や、降園時間が通常より大幅に長くなったことへの苛立ちのためと思われる感想など、必ずしも好意的でないものもあった。また、先行経験の豊富な保護者と思われるが、焼き芋に関する技術的なアドバイスの内容を具体的に記述している例もあった。

- 8) 担当者からは、2,000字以上の文章でまとめるなどいくつかの条件を付した。

### 文献

岩本廣美、環境教育における体験活動の構成原理－食文化に関わる内容を中心に－、奈良教育大学附属自然環境教育センター紀要、4、奈良教育大学、2001年、1-14.

大久保増太郎、『日本の野菜』、中央公論社、1995年、241ページ.